

在特会の論理（8）

——『嫌韓流』を地で行くH氏の場合——

樋口直人

(徳島大学総合科学部)

Logics of *Zaitokukai* Activists (8)

The Case of Mr. H

HIGUCHI Naoto

University of Tokushima

1. 問題の所在

運動参加者の類型化は、社会運動研究のなかで一定程度なされてきたが、極右運動に関しても試みがある (Klandermans and Mayer 2006; Linden and Klandermans 2007)。運動における参加者のキャリアによるもので、革命家、放浪者、転向者、追隨者という類型を克蘭ダーマンズらは提示した。それは過去とのイデオロギー的連続性、周囲の状況と自分の意思とのどちらが参加を促したか、という2つの要因によって分類されている。革命家とは、極右政治に生涯関与するような人を指す。放浪者は、極右的イデオロギーを持ちつつ自らに合った政治的帰属先を求めて彷徨する。それに対して転向者は、かつての生活や世界観を転換して極右へと関与する。追隨者は、友人や家族の勧誘で極右に関わる場合を指している。

これまでのところ、聞き取りに際して追隨者に出会うことは一度もなかった。これは、運動参加を促すミクロな動員構造がほぼネットだけであることの裏返しである (別稿で詳述)。転向者も何名か存在するが、それよりは政治的無関心が出発点である方が多い。日本の排外主義運動の歴史は浅いため、革命家がどの程度いるかは速断できないが、幹部クラスでは包括的なイデオロギー的転換を経験した者もいる。こうした参加者の分析は、調査をさらに進めてから行うとして、現時点で分類の基準となると思われるのは以下の通りである。(1)在特会につながるようなイデオロギーを、以前から持っていたか。あるいは、イデオロギー

的な転換を経験したか。(2)在特会につながるような活動を、在特会に関わる以前から行っていたか。(3)在特会に関わるようになってから、右派的なイデオロギーを体系的に吸収したか。2011年6月21日に聞き取りを実施したH氏(30代男性)の経験は、(1)(2)について在特会との親和性を示している。だが、それがなぜ参加という行為に変換されたのか、以下でみていきたい。

2. 政治に対する関心

政治に関心があるかないかといえば、正直ないですね。今もないです。単純に今、実際に誰に入れているかって、僕は全部無党派の人に全部入れるようにしているんですよ。あんまり群れないで頑張ってもらいたいという、自分のポリシーというんでしょうかね、そういうものがあって——で一応やっているんで、政治的な関心はないです。ただし、自分の持っている思想信条に関して1つの手段としてこれを使いたいな、という関心は若干あります。というレベルですね。

(選挙には)行きますよ。僕は結婚しているんですけど、嫁さんが行こうとするんで、一緒に車乗っけて連れて行って、ということをしていると自動的に毎回行くってことになりますけどね。独身時代も、実を言うと行かないときもあったんですよ。行かないときはなぜ行かなかったというのは、ちょっと投票所がすごく離れていて行くのが億劫だったので行かない。行くときはそんなに距離が離れていないから行ってた、という明らかに

行動学的に面倒か面倒じゃないかっていう区分で行ってたくらいですね。

たとえば比例選挙区だったら民主党以外で入れることに考えてはいますけど。そのなかでどれにしようかなとって、その時の自分の気分しだいで入れてたりするというレベルです。自民党に毎回入れようとかいう気はまったくないです。僕は、本当に気分が良かったらそのまま共産党、ということもやってたし。そういう適当な人間ですけど。

(在特会に参加してからも変化はないか) そうですね、だって見てたらわかると思うんですけど、政治家って馬鹿だなと思うでしょ。馬鹿だなと思うことでそんな関心持てないですよ。僕、個人的に政治に関心がないから、日本の総理大臣ってあのもう引退したクリントンですか、あのへんとかプーチンとかでもいいじゃん、持ってくればいいじゃんって感じでしか僕は思ってないです。有能なのが海外だと、中国・北朝鮮・韓国以外から持ってくればいいじゃん、でもありますんで。その方が合理的でしょ、みたいな。

結局彼ら(政治家)の目的というのは日本を富ませて、国民を飢えることなく育て、将来に向かってバトンタッチできるような、その、国家の継続ってのが彼らの最終的な目的だと思うんですけど。その観点からいくと僕らは彼らの目的は達せられてないのかな、という見方ではあるんですけどね。ですので、なかなか彼らに期待することもないし、そこまで政治に関心はないですよ。一時期小泉さんが出てきた頃っていうのは、若干関心は持ったんですけどね。ただまあ、終わってみればもう関心は薄らぐし、ということですが。

(投票行動も変化なしですか) そうです。相変わらず無所属主義でやっています。

3. 外国人との接点

外国関係は、僕が〇〇出身なんですけどね、〇〇の時に朝鮮部落というのがあって、彼らを当時外国人と呼べるかどうかの定義は別ですけど、学校に朝鮮人が通ってきてたんですよ。そこでのふれあいがまずあったことと、高校時代にアメリカとかに留学した時代があって、そこでアメリカの学生さんたちと仲良くなったというのはありますね。それからあとは社会人になってドイツに仕事で行ってたり、シアトル行ったりしてたんで、

そういうことがあってそれなりには触れ合っているんですよ。

外国人問題に関心はあったんです。実を言うと僕、〇〇という地区で朝鮮人部落というのがあるんですよ。そういうところがあって、親から朝鮮人とは付き合うな、あいつらと関わると危ないぞという教育があるんですよ、僕らの世代って。だから朝鮮人は敵だっていう、極論でいうとそういう教えがあって、学生時代はそういう連中と会って。たとえば修学旅行行くとときに、海外行くとときにパスポートがなぜか菊の模様じゃない別のパスポートを見たときに、「ああこいつ外国人なんだ」って。なんで外国人なんだろうという、在日韓国人なり朝鮮人なりであったり、そこで考え方の(上で) 関わり合ったらいけないんだな、という形で線を引くという立場をとってたんですよ。

あとは大学時代になって、△△のほうの大学行ってたんですけど、□□(在日コリアンの集住地区) っていうところがあるんですよ。あの辺の問題があったりして、そういう考え方、そういう教育方針で育てられた人間が、そういったところに行くとなぜか彼らとかうちの大学の学長とか教授とかが、彼らを擁護しようという方向にいつてるんですよ。

じゃあなぜ擁護するんだろうと考えますよね。じゃあ何で彼らとの逆説を唱える人がいないんだろうと不思議に思ったんで、ああなんだこんなことをやってたのか、という彼らの行動原理を目の当たりにして、そこから僕はこの活動でちょっと彼らに対しての抵抗運動みたいなことをやるようになってきたというのが正直なところですね。在特会ではなくて、それまだ僕が22、3歳の頃とかの話なんで、まだ在特会その当時できてないです。その頃は僕たちは、彼らと直接会って話して、あんたたち何を主張したいんだ、そういうディベートですよ。ディベートやることによって彼らの考え方を知って、彼らの考え方を否定したり受け入れたりとかいう形でやりましたね。ただ、その時はそのディベートし合って単純に相手の意見を打ち負かすとか、そういうところに喜びを見出していたので、楽しみといたらそういうことになるんじゃないですかね。そういう感じはずっとやっていた次第です。

大学時代からその辺考えてたりとか、やっぱり××問題で話考えてて、何か胡散臭い、黄色信号

がずっと灯っているんでしょうね。「在日」をキーワードとして。だからそこで言っているのかなと思えるんですけど。

そこからいろいろやっていって、大学を出てちょっとして※※に6、7年前にこっちに来て、みんなでディベートサークルを作ったんですよ。仲間内で。そのときインターネットもないので、本当に小さい掲示板でやって。地元掲示板であるじゃないですか。そういったところでそういった人いないですかねって話をしている、そうしたらいたって感じで。

その頃にちょうど※※では、従軍慰安婦問題が勃発しまして、そこで社会運動で従軍慰安婦はいたんだと訴えてきた人と対峙してディベート合戦していたと。在日というよりも、しょっぱなは従軍慰安婦の問題で、従軍というものはいなかったって話のテーマだったんだけど。在特会も同じなんですけど、こういう活動していくと、いろんなテーマがどんどんどんどん積み重なって、誰かが定義してテーマがどんどん増えてくるんですよ。それで継続してたという話になります。

彼らがいつも根拠のないことをどんどん言ってきたりするんで、そこをちょっと覆すのが好きなのかな。そういう考えでいくと彼らの論戦って結構、矛盾しているところって結構あるんですよ。一番気になったのが従軍慰安婦——私、従軍慰安婦ですという金さんが日本におられて、文句言ったんですよ。じゃあそういう時って、あなたなぜ従軍慰安婦っていえるの、証明してみてという話になるじゃないですか。仮に僕が100年前に僕の親父があなたに1億円貸してたから返してとあなたに言ったとしますよね、あなたじゃあまず何ていう？その時にお金貸したよという借用書見せてっていうでしょってまず言って。僕ら日本人側もそうだし、その時あなたが従軍だったよという従軍としての給与明細それ見せて、というのが僕らの論理であるんですよ。じゃあ何も示さずに私、従軍慰安婦ですよといっても、それは話信じられないよと。だからそこらへん明確にしてくださいねとかって話をずっとして。結構そんな感じで今に続いてきたという話ですよ。

そういうところから崩していくのが面白かったという感じですかね、若い頃は。でも大人になってくると、まあそんなことはどうでもよくなって、とりあえず大きな声で「やめろ」ということ

が一番重要なんだと。それが1人が「やめろ」と言っても聞かない。これまでのことでね、少人数が「やめろ」と言っても無理だったんで、大人数で「やめろ」と言ったらそれは変わるんじゃないかと思って。ということでやっていますね。

元々仕事が品質保証しているんですよ。誰かが検証したものを評価して、これ悪いですと言ったら「どう悪いの」というかたちになるじゃないですか。たとえばじゃあ何と何を比べてここはこういう風に数値出ているから、悪いという僕は認識の捉え方なんですけど。それで※※のほうでがんばってまして、今に至るのかなと。

4. 拉致問題について

拉致というのは、正直なところ実際に何を持って拉致とするのか、拉致というのがあったのかどうか、拉致の存在の定義が何かって考えたんですよ。その定義って近年になるまでわかんなかったじゃないですか。ある意味、情報で拉致があったというレベルでしかなくて、それがはっきり北朝鮮に拉致された人たちがいた、帰って来た、そこがはっきり根拠になってそこから考え始めたんですよ。だから知識的には、まあひとさらえですよ。でまあ、それは人として考えたらずやっちゃいけないことなんだと。あとはまあ、段階踏んでいけばという感じになると思うんですけど。

本当にだから、拉致という言葉が昔からついてまわっていて、本当にあるんだということで本物になった時に、やっぱりそれは憤り覚えますよ。だって自分の親しい人と——日本人って人の立場になって考えることのできる民族だと僕は思っているんですけど——もし僕が横田めぐみさんのお母さんだったりお父さんだったりしたときに、どれだけ心が痛むかと考えると、そこは発狂するくらい怒りまくりますよ。

（小泉訪朝について）その時に、僕はあの拉致された人がいたんだというよりも、それを明確にしてくれたんだということの方が関心は強かったですね。（それで何かしたいとは思わなかったんですか）だって僕らが、何ができますって感じで考えると、手段が思いつかなかったです。単純に言えることは北朝鮮に言って、「拉致した人を帰せ」ということくらいじゃないですか。じゃあ、果たして1人で北朝鮮総連に行行って返せといったところで、自分の身の保障もないわけですよ。人

を拉致するような国家の出先機関のところ、要はヤクザに喧嘩売りに行くようなものですよ。それはたぶん、一般の人だったらまず行かないですよ。自分の身がかわいいですから、と僕は思ってますけど。本当にやっぱりやるべきことは「返せ」という行動を起こすことなんでしょうけど、実際それができるだけのバックボーンがなかったというのが正直……。だからみんなこういう憤り感を腹に据えかねていた人が、在特会という団体があることによって外に吐き出せるんだと知ったら、だからこそこの繁栄した——繁栄といたらおかしいけど——ここまで皆さんにご支持されるような団体になったのかなという見方ですよ。

5. 在特会との邂逅

(在特会を) 認知するのがカルデロン問題です。皆さんがやった(2009年の)カルデロン・デモになるんですけど、そこで初めて在特会という団体があるのかなと知って、それをやるうちに僕らの作った団体が男女関係でもめたりとか、いろいろな問題があって空中分解しちゃったんですよ。そこでちょっと何かないかなと探していたら在特会というのがあって、あと在特会で関心を持った。カルデロン問題で、何かネットか何かの何かでカルデロン問題の話で、動画をアップしてたのがあって、そこからですかね。

というのは、彼らの在日特権を振りかざす連中というのは、いろいろなことをこれまでやってきたというのがあって、何でこれが続いてきたんだろうと思うと、誰も「やめろ」って大きな声で言わなかったから続いてこなかったんじゃないかなという考え方なんです、僕は。じゃあしつかりそいつらに面と向かって「やめろ」という人が、在特会がいたんですね。これは素晴らしいじゃないかということで、そこから在特会に入ったんですよ——というのが簡単な経緯になります。

(カルデロン関連の動画をみた経緯)そこはちょっと関心があって、カルデロン問題を論議する時に、なぜかそこに僕の中の考え方、彼らのあるべき姿というのがあって、それはやっぱり親子と一緒に住むことが一番望ましいと考えているんですよ。じゃあ日本で親子と一緒に住めないのであれば、母国に行って一緒に住むのがあるべき姿かなと思ったんですね。じゃあなのになぜそこを、それを率先しようとしなくていい人がいるんだろうと

思ったんです。

で、人権派弁護士ってのがそこに出てきたんですけど、じゃあ何で彼らは彼らが母国で安心して暮らせるような地盤を作ってあげるような努力をしないんだろう。なぜ日本で法を犯してまで強引に住ませよう住ませようとしてるんだろう。そこで僕、矛盾点を持ってそこにまずカルデロン問題って、あの女の子たちの問題じゃなくて、それを餌に何かをやろうとしてる人権屋と呼ばれている連中の考え方が僕は気になった。そこからずっとカルデロン問題ってのは見てます。だから最初にカルデロン問題を在特会でデモしたときに、次の年なんですけどもう1回やったんです。2年連続であったんです。2回目はカルデロンという女の子じゃなくて、そこを利用しようとする人権屋弁護士とかそういった汚い大人たちに声を上げようね、と持っていったという。

さらにもう一言付け加えれば、人権屋弁護士っていうのが、今後たとえば日本で住みたい女の子がいますと。涙流しながらテレビ会見してますと。普通しないでしょ。普通日本で今後また生活するかも、生活させてあげたいと思っている女の子をマスコミの目の前にさらして、日本全国でさらし者にしないでしょ。普通の大人なら。でもそれをあえてやろうとしている連中がいたんです。そこらへんがちょっと僕は大人としてちょっとこの人たちへんだなと思ったんですよ。で、何かおかしい。という形でいろんなことを検索かけると、在特会にひもついたわけです。(蕨のデモの後ですか)その前です。その前何か告知か何かで「やるよ」と出てたんです。

それまで、さっきも僕ちらっと言ったんですけど、マスコミが何でもそういった連中をみても「お前らへんだ」とか「やめろ」という声ってほとんどなかったんですよ。そのころ初めて在特会が——僕の体験では在特会が初めて面と向かって「やめろ」って大声で街中で叫んでるんですよ。僕はそこにすごくあこがれというんでしょうかね、やっぱり僕もこれやりたいなと思ったんですよ。だって言わないと変わらない、伝わらないですものね。ということですよ。

実際、会長も普段おっしゃっているんですけど、在日朝鮮人が悪いんじゃないんです。それを行使しようという連中がいて、それを手助けしようとする、悪いことだと知っていて手助けしようとする

る連中が悪いと思うんですよ。そこが問題なんで、そこをつぶさないと第2第3（の同様の問題）ってあるのかなと思ってますけど。

《最初の行動》

それもカルデロンなんですよ。1年目（のデモに）は行ってないです。ちょうどその頃、僕も学会の——学会というか技術者やってるんですけど——ちょっとそっちのほうの発表があったんで、そちらは行ってないです。ただ、多分皆さんと若干違う点があって、僕そこまでネットに依存している、そこまでのネットというのはあまりなかったんですよ。だから多分、見ている量が全然違うと思うんですよ。僕もインターネットで検索して1個か2個くらいカチカチってみて、ただそのとき上位に在特会のやつが来てたんで、印象に残ったんでしょうね。だからそこで怒らないと、人としてダメでしょというところがまず自分の中にあったんで、僕はそこで怒りを覚えた。

その翌年にカルデロン問題で蕨デモがあったんです。それに参加したのが初めてです。だいたい僕も1ヶ月くらい前に在特会に加入していたんですね。（会員になったのは）去年の1月か2月前ぐらいだったと。会員番号6000番台です。（その前年は）ちょっと多分仕事でばたばたしてたんだと思います。いろいろ在特会のイベントがあって、カルデロンの問題があって入国管理局とかに行っているいろいろあったんですけどね。そういったのも仕事がちょうどその頃は充実してたっていうか、忙しかった時期なので、そちらのほうを優先したということです。単純に（翌年の）1月2月、正月のときにヒマだったんでインターネット見てたんです。それで、じゃあ時間があるから在特会の会員に入ってみようかということで、会員入会手続きしたんです。

（それまで在特会のサイトは）定期的に（見ていた）。（実際に参加するに際しての抵抗は）それはありましたよ。初めて会ったこともない人たちに会いますからね。そこらへんの勇氣というのは結構必要だったですね。ただ、僕自身、技術者関係の横のネットワークというか、いろいろな学会に参加していると、まあいきなりでも名刺交換しながら初めましてってあるじゃないですか。あのノリで、ノリかなという延長線上でもあったので、多少の怖さというのはあったんですけど、その点

はそういう理由で経験があるのですんなり入れたという感覚でしょうか。

《関心》

（関心があること）僕はやっぱり、ずばり在日特権ですね。たとえば僕はですね、中国の故事でいって「隗から始めよ」というのがありますけど、まずやるなら目先のことからやりなさいというのがあるんですね。僕はそれを地元置き換えてまして、地元の在日特権をなくしましょうねということで動いているんです。たぶん他の支部も同じだと思いますけど。じゃあ地元でだって在日特権がありますと。他のところでどういう特権があるんだろうなって調べる時に、在特会のホームページが役に立つし、そこに知識というものが役に立ちますし。という感じでやっぱり「在日特権」ですかね、団体の名の通りに。僕らは在日特権を許さない市民の会ですから、在日特権のことを研究してなくしていくというのが第一義でしょう。ということはあるんですけど。ただ、そういったことをこれまでいろんな利権を求めようとしてきた連中が、他の事で原発とかいろんなことに手を出すと、「それはちょっとダメだよ」ということで活動ももちろんするんですけどね。

外国人参政権とかでもふらっと出たことなんですけども、だってあんたたち母国に帰れば参政権あるんじゃない、だったらいいじゃないそれで、と僕は思うんですけど。さらにそれ主張しちゃうと何かいやだって言う人もいるわけですし。あと在特会で、これは僕の指針なんですけど、一つ思うのはみんな道理を外すやつが嫌いなんですよ。理を外すというか。ですので、実際の道理だって自分参政権ほしかったら母国に入って政治に参加すればいいじゃんというのが僕らの考え方であって、それを他所の家でやろうというのが何事かと。

6. 活動の結果

《しやすい場所》

（想定と現実のギャップは）結構いろいろありますね。結構皆さん飲み会好きなんだなって。やっぱりイベントでカメラが向かっているところと向かってないところは、やっぱりそれなりの安心してしゃべれることもあるし、やっぱり皆さん人間なんだなって。まあそれこそいろいろな考え

方もあるし、みたい。いろいろな考え方が聞けることは面白かったのかなという。

在特会って結構しやすいというか、100人いたら100人の考え方があるんだよというのを前提にしたうえで、お話されるんですよ。たとえば、若干違う考え方でも「ああそうなんだ」って許容してくださって、根本は一緒なんで「がんばろうね」というのが在特会だと僕は思っていて、まあそれがいいのかな。

《やりがい》

やりがいになったことといたら、自分で計画したことはしっかりやることできたということでしょうか。こういうことをやりますよと言っちゃうと、もう逃げることでできないんですよ。だったらそこを責任持って最後までやれたということが一つ。そこで参加してくれている人たちに対して、いろんな能力がそれぞれ違うんですよ。たとえば××さんだったら撮影が得意なので、撮影の部分で全権お願いしますねとできたりとか。事務方が得意な人が事務方の作業できるって言って、この人ってどういうところ得意なんだろうとか、そういった見方というのが、仕事以外でもそういう見方ができるようになったというところがよかったことじゃないでしょうか。辛いところはさっきいったけれども逃げられないところですよ。実際「やるぞ」といって、本当に辛い時に逃げられないわけだから、そこは自分が言った手前やらなきゃいけないということです。

(活動のエネルギー源も) それですよ。逃げられないってことです。イベント出すじゃないですか。イベントを告知するともう動き始めてるから、そこで逃げられなくなってくるんですよ。それを続けようとする、また次のイベントを企画するんですよ。そこですね。で、僕らってみんなにはそんなに認められてない支部だと思うんですよ。派手なイベントはしないし。ただ、在特会も全部そうなんですけど、まず続けないと大きくはなれないんですよ。だから今は続けることが大事なんだということもあって、定期的——多分わざとイベント途切れさせないようにしているんです。言ったら言った手前、イベント、皆しっかりして続けて、良い緊張感を持って継続させる。そのうちにこつこつやってたら、という。

で、もちろんずっと続けても体調的に・・・100あ

る休日(のうち動ける日)が50あってそのうち在特30あるとつぶれるじゃないかという。つぶれないところという見極めでしょうか。これ以上やっちゃうと、この人(から)不満出ちゃうかなとか、ここまで・・・。最近、根詰めてがんばってたから、ここらへんちょっとみんなでゆっくりのんびり休もうね、とか。そこらへんってバランス感覚だと思うんですけど、そんな見方、みながらずっと継続していくことがまずは大事かなと思っているんです。

《右翼的なものとの距離》

そこはまず、僕だけの考え方でいくと僕は何も囚われないでいいと思ってます。自分がこのようにみてこれがいやだなと思ったら、そういった他の極右団体、たとえば皇室を実際に敬いなさいとか、そういったものは度外視して、自分の信念だけで動けばいいと思ってますよ。ただ、僕らは在特会という団体なんで、本部がこういう方針なんだといたら、ある程度そこには従う必要があるんで、そこ踏まえた上でやっていますよということでしょうかね。

(靖国参拝なんかは) 本部方針なら従うしかないでしょうけど、うちバカじゃないので、皆さんそういうときには反応するんですよ。「何で参拝する必要があるのか」って本部の幹部の人たちが会長に対して言うんですよ。それで議論されることがあるんで、そんなアホな道を、手段をとってことはまずないので。だから本部の通達っていうか方針は、そのまますんなり受け入れられると。ごもつなことですよという感じで。あとはそれに自分の信条あわせて、どうやってやるか。それから支部活動につなげるなら、自分の信条信念をちょっと出してもいいのかどうか、という。そこは他の運営さんたちにも話して「ここはこうだけど、どう思う？」といってやっていく感じ。

(だから靖国神社に行くことも) ないです。僕は逆に、靖国神社じゃなくて護国神社ってあるじゃないですか。すぐそこにあるんですけど、護国神社は1ヶ月に1回行ってますよ。昔から行きます、護国神社は。うちは元々神主なんで、実家が。それはもう親の教えですから。だからみんなそれぞれいろんな正義って100人いたら100の正義ってあるじゃないですか。それは在特会って否定はしないんですよ。だから僕ももちろんそうだ

し、僕も人の正義は否定しないです。だからいいのかな。だから自分の正義を大切に生きるということだと。

7. 結語に代えて

H氏は、家族から在日コリアンに対するネガティブなイメージを叩き込まれてきた。さらに、学生時代からマンガ『嫌韓流』でしばしば登場する「敵とのディベート」を実践してきた。それは社会人になってからも続いており、赴任した新たな地ではネットで知り合った者同士のグループを作っている。幼少期、学生時代、社会人と場所は変わっても在日コリアンと接点を持ち、しかもネガティブなイメージは継続してきた。その意味で、H氏は「東アジア地政学」という媒介を経ることなくして在日コリアンに対する否定的な感情を持っており、インタビュー対象者のなかではやや特異な存在であった。つまり、H氏は在特会と出会う以前から在特会の主張を先取りして内面化してきたともいえるわけで、そこに参加するイデオロギー的な転換は何ら必要なかったといえる。

だが、H氏が在特会に対して最初にインパクトを受けたのは、カルデロン・デモを動画でみたときであり、初めて参加したのもそれに関わるデモの時であった。H氏にとっての「自分の正義」とは、一家全員が退去強制になることである。それは、「子どもの権利を認めるのならば一家全員を在留特別許可にすべし」という国際人権基準とは著しくずれているが、H氏のような感覚をまったく特殊なものとはいえない。主権国家といえども、政治的リベラリズムの規範に配慮せざるをえない——こうした自由主義体制の持つリベラル・パラドックスの論理（Hollifield 1992）よりむしろ、メディアでは人情論が支配的であった。そうした人情論は、「法と秩序」という観点にもとづくマイノリティ敵視を誘発しやすい。

ただ、イデオロギー的には在特会ときわめて親和的なはずのH氏でも、実際の参加に際しては一定の躊躇を示している。これは、多くのマイクロ動員論が示唆する対人ネットワークを通じた勧誘プロセス——運動にとっては社会関係資本の活用——を経ない運動ならではの特徴だろう。在特会の参加者は、会につながる接点をネットでしか持たず、それは多くの参加者が示すためらいにつながっているが、それでも動員に成功したのも事実である。社会関係資本なき社会運動が、どのようにして動員に成功するのか、そして初対面同士が集う運動は既存の人的ネットワークに依存する運動とどう異なるのか。排外主義というイシューの特性を離れたところでも、在特会に関しては解明されるべき問いが多々あることを明記しておきたい。

文献

Hollifield, J. S., 1992, *Immigrants, Markets and States: The Political Economy of Postwar Europe*, Berkeley: University of California Press.

Klandermans, B. and N. Mayer eds., 2006, *Extreme Right Activists in Europe: Through the Magnifying Glass*, London: Routledge.

Linden, Annette and Bert Klandermans, 2007, "Revolutionaries, Wanderers, Converts, and Compliant: Life Histories of Extreme Right Activists," *Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 184-200.

（付記）本稿は科学研究費補助金による研究成果であり、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。